

まえがき

ここで紹介する聞き書き史料は、沖縄の本島の北部に位置する本部半島の西方、東シナ海に浮かぶ伊江島における一九六〇年代の抵抗運動に関するもので、嬉野京子、謝花悦子、国吉永啓の各氏にそれぞれ二回ずつインタビューし、それをテープから書き起こしたものである。

一九六〇年代の伊江島でのアメリカ合衆国（以下 アメリカ）軍に対する抵抗運動は現在、本州に住む私たちはおろか沖縄本島でもあまり知られていない。そこで今回私たちは、この伊江島に注目することで、ベトナム戦争拡大期の沖縄の実態を知る一つの手掛かりを得ることができればか、このままでは忘れられてしまうかもしれない当時の沖縄の人々の思いを少しでも記憶として残し共有することにも繋がると考えたのである。

沖縄にアメリカ軍基地ができるのは第二次世界大戦末期のことであった。沖縄は、一九四六年一月に連合国の占領政策の一環としてアメリカ軍の占領下に置かれることが確定した。その結果、沖縄住民による自治は大幅に制限されることになる。そのうえ沖縄は「冷戦」構造の中でアメリカにとつてのアジアの共同の砦として位置づけられ、朝鮮戦争（一九五〇～一九五三年）では米軍の朝鮮出撃基地としての役割を担った。一九六一年から始まるベトナム戦争下でも同様であった。したがって、ベトナムでの戦況変化はアメリカ軍沖縄占領政策に反映され、沖縄住民の生活はその波紋に巻き込まれていった。

次に「冷戦」でアメリカが、北爆や地上部隊の派遣など本格的に参入していった推移について簡単に述べてみたい。一九四六年一月一九日以降戦争が継続していたインドシナでは、一九五四年にスイスのジュネーブで結ばれたインドシナ休戦条約（ジュネーブ協定）により一旦平和が訪れた。このジュネーブ協定で北緯一七度線に沿って設けられた非武装地帯が、ベトナムを分断することになった。その結果、北ではホー・チ・ミンを首相とした社会主義政権が確立し、南ではアメリカが押すゴ・ジ・ジエム政権が誕生した。

一九六一年に入ると「冷戦」下の抗争が激しさを増す。民族解放戦線（NLF）は、ソ連、中国からの経済的・軍事的援助をうけ活発な活動を開始し、南ベトナム軍の前線部隊に対しゲリラ攻撃を行うようになる。同一年に発足したケネディ政権は、従来の共産主義勢力拡大を阻止する目的に加えて、ゲリラ戦に對抗し、アメリカの威信を示すという新たな目的を掲げ、六三年末までに約一万六千人の軍事顧問を派遣する。そして一九六四年八月にトンキン湾事件が起こると当時のアメリカ大統領ジョンソンは、北ベトナムへの報復攻撃を宣言し、アメリカ議会からは「自由な戦争権限」が与えられた。翌一九六五年にジョンソンは、ベトナムへの五万人の兵力増員を決め、それに伴い徴兵数も増加している。現に同六五年にはアメリカ軍の地上戦部隊第一陣として海兵隊員三五〇〇名がベトナムに派遣され、北ベトナム爆撃（北爆）も強化されていった。こうしてアメリカは南ベトナム軍側に付いて戦争に直接的かつ本格的に介入していき、ベトナム戦争におけるアメリカ軍の存在は大きくなっていく。

ベトナム戦争にアメリカが本格介入していく一九六五年からの流れのなかで、アメリカ軍にとつての沖縄の重要性は増していった。沖縄には、B五二戦略爆撃機の発進基地、ベトナム戦線に向かう兵士の最終訓練場、兵器、弾薬の補給基地、ベトナム帰休兵の保養地など、軍関連施設が次々と建設されていった。

伊江島の風景も「冷戦」下で変えられていった。まず、第二次世界大戦直後、伊江島住民は、那覇西方海上にある慶良間諸島に移送され、その後、伊江島から近い本島北部の本部（もとぶ）の收容所に移され

などの経緯を経て、一九四七年三月に二年ぶりで伊江島に帰ることが許された。島に帰った住民が見たものは、軍用自動車が行き、頻りに軍用機が発着する飛行場など軍の施設ばかりが目につく変わり果てた島の姿であった。米軍施設のほかに人の住める家屋などは一軒もなかったという。島の住民たちは、荒れ果てた伊江島で、なんとか生活できるように、「ブルドーザーで踏み固められあるいはコンクリートで覆われた土地に鍬を打ち込み」、少しずつ農地に戻していった。

しかし「冷戦」下のアジアで反共産主義の砦と位置付けられた沖縄では、土地収用の嵐が吹き荒れ、伊江島の住民も土地問題に襲われる。いわゆる「銃剣とブルドーザー」である。朝鮮戦後軍事拡張政策でアメリカ軍は一九五四年に伊江島住民に立ち退き命令を通知し、演習場の拡張を始める。これに対して伊江島住民は、阿波根昌鴻氏を中心に一丸となって土地闘争を始める。その闘いを貫いたのは、米軍による非人間的な扱いに対し、「我々も人間なのだ」という人間としての尊厳を主張するという考え方であった(阿波根昌鴻『米軍と農民』参照)。ベトナム戦争下の伊江島住民の闘いは、こうした一九五〇年代からのアメリカ軍との闘いの延長として位置づけられる。

私たちがインタビューを行った一人、嬉野京子氏(一九四〇年、東京生まれ)は、一九六五年と六七年、まさにベトナム戦争下のただでさえ入ることの困難な沖縄に入り取材を行った。しかも、島民たちが一丸となって闘っていた伊江島に足を運んだ報道写真家である。そのとき彼女は、住民に歓迎され団結道場建設の起工式にまで参加している。本土から来た人物が島民の懐(ふところ)の中に入り込み島の実情に触れたのも、嬉野氏だからなしたことであろう。

この嬉野氏のインタビューに加えて、謝花悦子氏、国吉永啓氏とのインタビューを行うことで多様な視点からベトナム戦争拡大期の沖縄を見ていくことを試みた。謝花氏は、故郷沖縄を二年ほど離れ東京で暮らしていたが、伊江島土地闘争の指導者であった阿波根昌鴻氏に呼び戻されて一九六六年ころに島に戻った伊江島の住民である。謝花氏は、一九六七年当時物価が高かった伊江島でその物価を抑えるためという目的と、アメリカ軍に対する闘争の貴重な戦力となる若者たちの雇用先を確保するという目的で作られた生協の活動に従事した。また、北爆強化で激しさを増す演習を間近に見ていたばかりか、一九六六年に行われた島ぐるみのトマホークミサイル撤去運動を知る数少ない人物の一人である。現在も沖縄県伊江島で阿波根昌鴻氏の意志を継ぎ米軍占領下の伊江島の状況を今に伝える平和資料館「命(ぬち)どう宝の家」の館長を務めている。

国吉永啓氏は一九六一年に沖縄タイムス社に入社し、社会部の空港担当を経て、アメリカ軍基地担当者として記者生活を始める。伊江島には一九六六年に自身の取材の裏を取るために訪れたという。アメリカ軍基地担当者として二二年間の経験をもつ国吉氏は、一般市民が知り得なかった当時のアメリカ軍の内情に精通した人物である。

もちろん三人の見解も経験も同じではない。嬉野氏と謝花氏の証言からはベトナム戦争拡大期の沖縄でアメリカ軍と最前線で対峙する住民の姿が見えてくる。伊江島におけるホークミサイルの島内からの撤退に成功したと言う謝花氏に対して、国吉氏は島民の反対闘争があるなしにかかわらずミサイル訓練が通常の訓練に比べ短期間に設定されていた可能性を示唆している。つまり島民の運動の結果ホークミサイルの撤去が行われたのか、米軍にとっては予定通りの撤去であったのかは不明である。こうした不明さや矛盾

を抱えているのも伊江島の実態であろうと私たちは考えた。

三名の証言から私たちは何を知ることができるのか。それは主に二点である。まず、嬉野氏が逮捕され、取調官から言われた「あなたが沖繩にいる限り、生殺与奪の権利をわれわれ米軍が有していることを君は覚えておきなさい」という言葉や、アメリカ軍による伊江島の山狩りなどが実行されたことから、アメリカ軍の断固たる支配の姿勢が窺える。これには当時の沖繩を知らない者は衝撃すら覚える。北爆増強期の演習の様子は国吉氏の話から想像できるし、それが住民に与えた恐怖は謝花氏の話から読みとれる。いずれも、ベトナム戦争拡大期にアメリカ軍による伊江島支配の実態を示している。その一方で、伊江島の住民が、アメリカ軍の支配にただ甘んじることなく、ホークミサイルの持ち込み阻止闘争、団結道場の建設や生協の経営など島を挙げての組織的な抵抗運動を行ったこと、つまり島民による島ぐるみの闘いがあったことも知ることができよう。

言い換えればここに収めた三人の証言は、当時の沖繩を経験した人々の生の声に触れることを可能にしてくれる貴重な資料であり、被害者としてのみ沖繩に注目する見方に見直しを迫るものである。